
L I N K

明 綾乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L I N K

【Nコード】

N2089J

【作者名】

明 綾乃

【あらすじ】

幻想とは、箱の中身。 中身を観測したその時にはもう遅く、貴方の幻想は崩れるかもしれない。これは、ある女の選択によって分岐する前の箱の中身。その選択によって世界は分岐し、片方は銀の雨の降る世界へ、もう片方は魔法と魔術の交差する世界へ…
貴方は、幻想を壊す覚悟なんて、持ち合わせていますか？

シュレディンガーの明かない箱

それは…銀色の幻想と、七色の幻想の交錯

『5年前』

2004年12月25日

都心の住宅街の中央、極めて上層の人間にのみ住む事を許された高級マンションの一角。
入居者の居心地良さを考えた最高峰の空間はあらゆる外界の雑音をシャットアウトした。

そもそも、そのマンションに住む人間にとってはある企業組織の重鎮とその娘が言い争う声など聞いても無視するだろう。
重要な立場に立つ人間達ほどその関係はそれぞれが不可侵であり、関わり会うことであれ行きつく先は互いの牽制である。

このマンションは、そういう人物達を客層とした安価な要塞であった。

それ故に、一人の男が欲望のままに女を抱こうと組み敷いた音など、誰も聞こえなかった。

それ故に、一人の女が理性の崩壊を知らせる絶叫をあげ、男を突き飛ばした事など、誰も気づかなかった。

それ故に、二人の人間が刃物を振り回す気配など、誰も感じなかった。

それ故に、男が己の血で部屋を真っ赤に染める場など、誰も見なかった。

それ故に、それ故に、一人の男が死んだ事実 など 誰も知らなかった。

死体を発見したのは、新人の警備員だった。

そして女は、自らが生まれおちたその日に『 を捨てた。

もそもそ奇跡とは何故隠匿されたのか

日常の世界において、魔術は十分なほど世界に浸透していたはずなのに

人間の持つ当たり前の知識に魔法は確かに存在するのに

秘匿されるのは奇跡であるが故か、それとも・・・

『 8年前』

2001年

「魔法は、確かに存在するんだよ。」

『 7年前』

2002年

「だいぶ様になったじゃないか」「えへへ・・・」

『 6年前』

2003年

「もう、迷わない…私は貴方についていく」「だから無茶をするなよ!!お前が傷ついて…哀しむ奴はあいつだけじゃないっていうか…俺もっていうか…」 「俺は…魔法使いとしての責任を果たす」

『5年前』

2003年

「p 絵3クYdフイエロppcfv血おびつY樹お3言つfkgr
8y府8つ9うh家rfgdffy補dy9p8dり789うhdY
78yじ09p@0y67おytぎ67とy98fr78お9y入
rdf8るrtggふいお89ねじyh78おえる90えyh9dふ
お;yh8お7ういえ4おphgg89いうpふお89う43...gg9
00!!
!!
」

『4年前』

2004年

「ああ殺した…無明・安部瑠を殺したのは…俺だ」

『』

「ああ…魔法なんて」

『』

「ああ…私には魔法しか」

「
「
ない
「
「

2001年 6月2日

Q・2001年1月3月4日

「お前らに何が解る！！不条理の上に成り立つ魔法さえも開き直り、享受する

お前らなんかに、いや…お前らの為にも、私は負けない！！いや、負けるわけにはいかないんだ！！！」

反の魔法使い：明 綾乃

2001年 6月2日

私の父は、最低の人間だった・・・

夕暮れ時の公園で、一人小さいブランコを揺らす姿がある…それが、当時の私の姿だった。

私は何より学校に行く事が楽しみだった。

私には名前が三つあった、いや…正確には名前が一つと苗字が二つ。それはアメリカ人の父と日系中国人の母を持つ私の名前だった。

ただそれだけで、趣味もなければ得意な事もない…私はただ恵まれているだけだった。

しかし、運命の女神は当然のように…恵みの対価を執拗に求める性格らしい。

私は何より家に帰るのが怖かった、家に帰れば…また母の悲鳴を聞く事になるから…

だから私は家に帰る時間が少なかった、忙しいのではなく、こつやつて外で時間を潰していた。

「ちよつと聞きました？あのモーガンっていうお家…」「ああアレでしょう？DVとか言つの…」

「本当にうるさいわねえ、とつとと離婚すればいいの……」

「……………っ!!」

私は耳をふさぎ、涙の溢れる目をつむって塞ぎ込んだ。

「…っ…皆…勝手なことばかり…」

「…何してるんだい？」

「……………っ!!」

私はハツと顔をあげて、声の主を見た。

白い髪に痩せ細った軀に、似合わない厚く黒いコートを着た青年が、そこに立っていた。

「…何でもないもん…こんなとこで見知らぬ中学生に話しかけるなんて、変な人扱いされてもおかしくないよ?」

当時の私は、本来のおしゃべりな性格と…この環境のせいですれていたようだ。

しかし私がそう言うと、男はおどけるようにお辞儀をして律義に返してきた。

「そうかい?じゃあ自己紹介からだ…僕はアベル、無明・安部瑠…」

しがない魔法使いだ。」

「……………はあ?」

私は本気で、彼の自己紹介を聞いたうえで自分の耳と、この男の頭を疑った。

今時、魔法使いを名乗るような人間はいないと思っていたし…マジシャンでさえ公衆の面前で声高らかにそう自己紹介する者はいまいと思っていたから当然だろう。

「…………貴方、よく変人とか言われるでしょ?」

「引きこもりとか、もやしは言われるが…それは初めてだねえ…まあ僕自身あまり屋敷からでないから当然かね?」

「それは言われるんだ…」呆れて反した私の頬に、突然その男は手を伸ばしてきた。

何をされるかと身をちぢこませた私の頬から、涙をすくい取った男

は言う。

「知ってるかね？この世で最高位の魔法使いさえも、涙に弱いつて事。」

私はかあつと顔を紅くして、男から顔を反らす。

「な、恥かしいと思わないの？…そんなセリフ」

「別に？歴史上の事実を述べたまでさ…僕でよければ、話し相手にしてくれないか、ね？」

男はそう言つて、私に満円の笑みを向けた。

「言えるような事じゃないわよ…」

「そうか、残念…」

「でも、今暇だから…話し相手くらいにはなつてくれる？」

私がそう言つと、男は本当につれしそうに私を視た。

それが私モーガン・明・綾乃と、魔法使い…無明・安部瑠との最初の会話…

「モーガン、ふむ…泉の魔女の別称だね

モルガン・ル・フェ、かのアーサー王から不死身の魔法のかかった鞘を奪い

彼を死に至らしめた、という説もあるまさしく魔女だ。」

「それ、あんまり嬉しくない」

隣り合つたブランコに座り、アベルは私の名前を聞いてそういつた。失礼極まりない、正直者なのだろうがこの男は容赦なく私の名前を魔女と言わしめて見せた。

「おつと、まだモルガンの話には続きがあるんだよ

イタリアではファタ・モルガーナ、イギリスではモーガン・ル・フェイと名を変えるモルガンだけど

その意味の多くは3の数字をあてがわれた妖精という意味なんだ」

「妖精ねえ…」

半場あきれて返す私に彼は続ける。

「3というのはケルト神話では最高位の神秘的数字とされていてね、

カバラーでさえ0が三つ並べば概念上最高位のアイン・ソフ・オウルとなるように神学において聖なる究極の数字とされているんだ。さらにモルガンは一般的な見解では魔女としての性格が強いけど、妖精としてのモルガンは…まあそれに近い主人公たちを惑わす役になっているね」

「ふうん…」

「しかし人間から妖精になった例の一つであるモルガンは、アーサー王の異父姉弟という説もある

彼女は魔法が禁止されていたアーサーの故郷において悪である魔法を使う妖精になって

あくまで悪人として彼を別の視点からサポートし続けたともされているんだ」

「…異父姉弟、ねえ」

アベルの奈が話を聞き、私は肩肘をついてため息をつく。

私の父も違っていたらよかったのに…そう思っていた。

「…名は本質を表すと、日本では古くから言われているね

でも、逆に本質から名を生み出すというパターンがあってもいいはずだ。

僕の名だってアベル、旧約聖書では人類最初の殺人事件の被害者ときた」

「…ひどい親もいたものね？」

私がそう返すと、アベルはうつむいて答えた。

「まあ、親の実験だからね」「…え？」

アベルは顔を上げて空を見ながら話す。

「名前は体に繋がり、成す文字は物質を物質として成り立たせる起源となりえる

君はいつか誰かを導き、その最後を見届ける運命にあるのかも知れないね…」

「…バカバカしい、そんな魔法みたいな事…」

私がそう言っていると彼は真剣な眼を私に向けて、こう言った

「魔法は、確かに存在するんだよ
僕は魔法それに縛られていて、君もまた現実に縛られているのなら僕は君を縛る現実を壊してあげよう…
君は、現実を壊す覚悟なんて…持ち合わせているかね？」

父の浮気が発覚したのは、私が中学に進学した数日後だった。
母は中国ではマフィアに近い性格の成金一族の末裔らしく、父はそんな母の金目当てで近づいていた…

そんな事を知ったのもその日、父の開き直った独白からだった。

流石に母の明家も日本で中国の暴力団の力を行使するわけにはいかず、それどころか祖父たちは母の婚約に反対していたらしくほぼ勘当状態に合ったらしい。
更に父は用意周到に、守りを固めるように日本の高級住宅街に居を構え準備を進めていた。

だから父が開き直ってそれから、父から母への一方的な暴力の日々だった…

それまで何も知らずに、ただ珍しい環境に生まれたということも漠然と認識していただけだった私は
その家族から逃げて、『外』でこうして耳をふさいでいた。

母が離婚しない理由が、私という娘の存在によるものであると知りながら…

けれど、どうしようもない…こんな不条理に対抗するすべなんて…
私は持っていなかったのだから。

アベルのその言葉は、まるでアダムとイブに知恵の身を教えようとする蛇のようで…

それを言い訳に、何もせず私は…

「
「

アベルの手を取った。

根本

父は、臆病な人間だった。

父は、何もかも無くしてまで一緒に居ようとした母を酷く恐れた。

自分が卑怯な人間であることを知っていたから、いつか総て奪い返されるのではないかと恐れていた。

だから隠れて暴力をふるった、私が気付くずっと前からそれは続いていったそうだ。

今みたいに形のある暴力ではなく、見せつける事に寄る心への暴力をひたすら…私を含めた外野に見せないように。

しかし、私が…その日父しかない筈の家知らない靴が置いてあるのと…

感じの悪いオンナノヒトが家を出るのを見たその日から、母への暴力は明るみに…そしてエスカレートしていった。

そんな父が家の外では何であんなに立派な人間として振る舞えるのだろうか…不思議に思えた。

しかし、だからこそ臆病な父は生きてこれたんだ。

母は、力のない人間だった。

正確には、自分から羽毛を総て筆り捨てた愚かな人間だった。だからその憎しみは父には向けられず…私に向かった。

暴力に走る程の力も尽きていた母は、あの日から私に父への怨念をひたすら口に出した。

毎日、二人きりの時は、仕事の長い父が帰ってくるまで続いた。聞かせるだけ聞かせて、私には何もさせなかった。

元気な時も、怪我をした時も、風邪をひいた時も、病気になった時も…

悔しいと感じる事は何もなかった。

父が母を殴りつけても悔しくはなかった。

姉が家出するように全寮制の学校に進学していても悔しくなかった。

母が私に怨念をぶちまけても悔しくはなかった。

それでも何もさせてもらえなことも悔しくはなかった。

悔しかったのは、何も悔しくはなかった事だった。

私もまた、力のない人間だった。

それを認める事が嫌だったから、私はあの日も公園に逃げ込んでいた。

魔法まじきの力が欲しかった。

魔法で母が少しでも元気になったら

魔法で姉が帰ってきてくれたら

魔法で父に少しの勇気をあげる事が出来たら

………違う、違う違うちがうちがう！………！！！！！！

私は、ただ力を得て彼らを見下したかったんだ。

彼らは私を人間として見ていなかった

ただの愛すべき人形と思っていた。

私にとって、彼らは只の壁だった。

モーガン・明・綾乃

無明家

□ 年 月 日

夜の書齋に座る女性はどこか熟年した老婆を思わせる雰囲気携えながらグラスの酒を煽る。

後ろから来たもう一人…否、彼女自身の存在に気づきながらも彼女は気づかないふりをして本の頁をめくる。

そこに書かれているのは10に分かたれた魔法を使う者たちの物語。

「あら、久しぶりね…といつてもあなたは過去の私かしら？未来の私かしら？」

「さあ、それは互いにわからないほうが身のためじゃないタイムパラドクスなんか気にするよりは何も考えずに飲み交わしたほうが気楽なものよ」

歩く女性の言葉に座る女性は答える、彼女は外見も声も銀の瞳も総てが同じだった。

「あら、シカト決め込むつもりだと思つてたけど案外話を聞くものね拒むことを選んだ末路たる貴女にしては行幸と言つべきかしらね？」

「何とでもいいなさいな、それに末路となった覚えもないしね」
「かんらかんらと歩く女は笑い尋ねる。」

「人間何事も終わりが肝心、あなたが一番それを理解してると思つてたけどね？」

本を閉じて座る女は歩く女を見据える。

「貴女こそ、そういう事は絶対に否定すると思つてたやっぱり、同じでも私とあなたは違うものね…育ちが違う？」

歩く女も、他同時のように動かしていた足を止めて座る女を見る。

「正体わかつてるじゃない、お互いに…
…というか、育ちは同じだったのにな」

「私はずっと引きこもつてたじゃない、楽園に」

二人して笑う。

夜、人気のない…それどころか人間の気配がどこにもないそこそ現実化夢かもわからない書齋に響く二つの同じ笑い声はシユルレアリズムのように不気味さをいつそう際立たせていた。

歩いていた女は手元の本棚から本を一冊開いて見る。
「私は果たして自分の本心にその時はたして気づいていたのかしらねそれともそれには気づかず、ただ漠然といつもとは違った何かを求めて来ただけなのか…」

私にはもうわからない、そっちは？」

「さあ…ね

ただ安部瑠の手を取った私は、不思議とその手が軽い事を感じていたのは確か

外の世界の具現が現れてくれたことに安心する気持ちは、貴女に近いものなのかしらね？

依存することを選んだ”私”？」

そう言う”拒むことを選んだ女”は歩いていた女に手を伸ばす。

”依存することを選んだ女”はフツと笑ってその手を握り立たせるように引つ張った。』

その手に引かれ、気付いたら広い屋敷の玄関前に立っていた。

表札には無明とあり、塀の四隅には麒麟の彫刻、さらには屋敷だけで町の数分の1は取るのではなからうかとも思える広大な敷地目立つなと言うほうが無理といえるこの敷地は、それでも自然にこの町に存在していた。

「珍しいかね、武家屋敷って」

「…何でその武家屋敷に紹介されなきゃなんないの…？」

呆れたように呟いた明は女子中学生である、なし崩しに手をひかれ歩いてきたが

これは訴えれば余裕で犯罪とも認められそうなほど手際のいい拉致

に近かった。

そもそも自分がなぜこんな胡散臭い男についてきたのか、それを公開し始めた矢先だった。

「こらっ、アクティブ引きこもり!!」

矛盾した罵声をアベルに投げかける少年が、塀の上に立っていた。「ヨオ、ただいま下院」

「こんな時間までほっつき歩いていると思ったら、誰だよその女は？」
「え、あ…こんにちは」

思わず挨拶してしまう明をよそに下院は阿部瑠に向かって飛び降り、その脳天に踵落としを炸裂させる。

「ぐあ!?!うおお、塀の上からは反則…」

「反則もくそもあるか犯罪兄貴、ジジイの影響か!?!遺伝なのかくら!?!」

阿部瑠は脳天を抑えるのとは別の手で激情する下院を抑えて落ちて着かせる。

「まあまあ落ち着いて、そんなことないからお爺ちゃんみたいに節操無くはないから、ね?」

明は二人のやり取りから不穏な案格を覚え、そこから立ち去ろうとするが…

「こんなエロい体格の女連れ込んで…」

「エロ・・・っ!?!?」

思わず顔を赤らめて胸を両腕で隠す、明はコンプレックスに思うほどではないにせよ

何故か彫刻のような豊富な体型をしている自覚はあった。

しかしエロいと言われるのはこれが始めてである。

「だいたい陰性の女なんか連れ込んだら結界に穴が開くだろうが、何のための結界だと思ってるんだ!?!」

そんな役にたたなそうな馬の骨早くもとの場所へ返して…」

「……………」

兄の気まぐれへの叱責として、罵詈雑言を飛ばす若き下院少年は

明が彼自身の頭に腕を伸ばしていくことなど気づいておらず…

結果その頭を鷲掴みにされた。

「え……………」

下院もまさかこのタイミングで頭を捕まれるとは思っていなかったのだろう、呆けた顔で明を見る。

般若のように怒気を孕んだ顔がそこに逢った。

「おい小僧、いって良い事と悪い事があることくらい知ってるわよね？」

誰が陰湿だ？誰が馬の骨だ？誰がエロいだ？初対面の年上に対する礼儀程度どつとくの時間に習わなかったのかしらああ？」

ギリギリギリギリギリ

「いつ……痛いイタイイタイ！！割れる！！もげる、ごめんなさあぎやあああああつああ」

人気のない住宅街に若き下院少年の悲鳴がこだました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2089j/>

L I N K

2010年11月14日09時54分発行